

邦楽調査掛における弘田龍太郎の記譜作業について ——再調査と浄書を中心に——

大地 宏子*

Hirota Ryutaro's Notation Work in the Hogaku Chosa-gakari ——Focusing on Re-investigation and Final Transcription——

OCHI Hiroko

要 約

明治40(1907)年、東京音楽学校に邦楽の研究機関として設置された邦楽調査掛の主たる事業は、日本伝統音楽の蠟管録音と五線譜化であった。作曲家の弘田龍太郎はこの邦楽調査掛の調査員として邦楽の五線譜による採譜・記譜作業にあたり、とりわけ再調査と浄書に尽力した。本論では弘田の邦楽調査掛における記譜作業の全容を明らかにしたうえで、弘田の再調査と浄書に着目し、それらの経緯と彼の浄書した楽曲の一覧を整理した。雅楽をはじめ12種目の五線譜化に携わり80曲以上の浄書譜を完成させた弘田が、邦楽の五線譜化に強くこだわった背景には、普遍的言語として西洋音楽の五線譜に記すことによって日本伝統音楽の近代化をはかった邦楽調査掛の国威発揚的な政治風土があったことが浮き彫りとなった。

キーワード：弘田龍太郎、邦楽調査掛、日本伝統音楽、五線譜化、浄書

はじめに

明治40(1907)年、東京音楽学校に邦楽の研究機関として設置された邦楽調査掛は、日本伝統音楽の蠟管による録音と五線譜化、ならびに『近世邦楽年表』の編纂・刊行、邦楽演奏会の開催等を事業の柱とした。この邦楽調査掛の調査員として、童謡作曲家の弘田龍太郎(1892[明治25]～1952[昭和27]年)が東京音楽学校に在学中より従事していたことはあまり知られていない。弘田は大正3(1914)年から昭和2(1927)年までおよそ14年にわたり、主として邦楽の五線譜による採譜・記譜作業にあたった。近年、邦楽調査掛における五線譜化の調査は順次おこなわれているが、とりわけ弘田の再調査

と浄書について注目されることはほとんどなかった。そこで本論は、弘田の邦楽調査掛における記譜作業の全容を明らかにしたうえで、弘田の再調査と浄書作業に着目し、それらの経緯と彼の浄書した楽曲の一覧を整理することを目的とする。

1. 先行研究と本研究の主要な資料

邦楽調査掛がおこなった邦楽の五線譜化事業¹⁾について、各種目のそれに着目した先行研究がいくつかある。たとえば、平曲の五線譜の成立を辿った薦田治子の研究²⁾ではこの方面の研究に関する基盤資料が数多く提示された。雅楽の五線譜化を丹念に調査した寺内直子の研究³⁾では関連する資料がくまなく整理され、調査方法の点でも多くの知見を得られる。その後、塚原康子の研究⁴⁾により邦楽調査掛に

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

関する重要書類がデータベース化され、膨大な資料の整備が進められた。とりわけ本研究の調査の基盤となる『邦楽調査日誌』等のマイクロフィルム資料や邦楽調査掛の採譜事業で残された五線譜とその目録化（およびこれら資料の公開）によって五線譜化事業の総合的な研究基盤が構築されつつある。近年では長唄における五線譜化の経緯を明らかにした大久保真利子の研究⁵⁾や、常磐津節のそれを調査した前原恵美の研究⁶⁾があり、大久保は弘田の再調査にも注目しその業績を研究する必要性に言及している。

先行研究の調査方法にならって、本研究の調査にあたり主に用いた資料は以下の3点である。

- ①『東京芸術大学百年史 第二巻』(以下、『百年史』)に収録されている「邦楽調査掛」の項⁷⁾
- ②塚原康子「邦楽調査掛関係資料の調査について」(以下、「塚原資料」。註4参照)
- ③五線譜化作業の経緯を記録した『邦楽調査掛日誌』(以下、『日誌』⁸⁾)

これらを用いた調査方法、および調査結果については第3章以降で述べる。

2. 邦楽調査掛の五線譜化事業と弘田の記譜作業

邦楽調査掛における五線譜化作業では、採譜のために邦楽各派の家元もしくは第一流の演者を邦楽調査掛へ招き（雅楽と箏曲については東京音楽学校の実技授業担当者がこれを兼任した）、種目ごとに決められた記譜担当者が記譜をおこなった。邦楽調査掛の開設から弘田が調査員として任務していた昭和2（1927）年度にかけ、五線譜による記譜担当者と主事、および邦楽調査掛長である学校長の経緯とそれぞれの任務期間を年表で示したものが表1である⁹⁾。弘田は東京音楽学校研究科器楽部ピアノに入学した大正3年より同校の授業補助（ピアノ）を務めつつ、邦楽調査掛の調査補助として五線譜記譜の任務にも就いた。その後大正5（1916）年に同校の研究科作曲へ入学し、卒業した大正8（1919）年の4月より同校の講師（翌9年から助教授）として教鞭をとると同時に、邦楽調査掛の嘱託員を務めた¹⁰⁾。ちなみに、弘田は大正7（1918）年に創刊さ

表 1 邦楽調査掛 記譜担当者調査期間

		明治															大正元										昭和元									
年度		40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	2	3	4	～	10										
校長												↓ 茨木清次郎																								
		湯原元一											村上直次郎										乗杉嘉壽													
主事	富尾木知佳	主 事(教授)										大6.10.6没																								
	高野辰之	調査嘱託	調査員(教授)										主事(教授)																							
記譜	鎗田倉之助	← 調査補助	※大正6年以後、「調査嘱託」は「嘱託員」に改称																																	
	三宅延齡	調査補助					調査嘱託																													
	林 蝶	調査嘱託																																		
	本居長世	調査補助	調査員(助教授)																																	
	楠美恩三郎	調査員(助教授)										嘱託員(講師)																								
	前田久八	調査員(助教授)																																		
	竹内平吉	調査補助																																		
	*小原和孝																																			
	*竹内鑑三																																			
		弘田龍太郎											調査補助 授業補助(ピアノ)					調査員(助教授) 助教授(ピアノ,音楽理論,和声論)										在外研究								
雅楽(記譜)	北村季晴	器楽部ピアノ										研究科器楽部ピアノ					↑ 講師(ピアノ)					↑ 教授;昭4.7.8-9.12														
	梁田貞											研究科作曲部					嘱託員					嘱託員														
	*は記譜応募者																嘱託員					嘱託員														
	多久寅																調査員(教授)																			
	多 忠基																調査嘱託(講師)																			
	東儀俊龍																調査嘱託(講師)																			
	奥 好義																										嘱託員									

(『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』(十) 関係者一覧より筆者作成)

れた『赤い鳥』をはじめ児童雑誌等に数々の童謡を発表し始めたのもこの時期で、邦楽の記譜作業と童謡の作曲を並行しつつ、本務の研究教育に従事する多忙な日々を送っていたことが推察される。

表2は『百年史』「邦楽調査掛」の(五)「採譜」¹¹⁾をもとに、弘田が記譜作業に携わった12の邦楽種目¹²⁾とその従事期間を時系列で示したもので(『日誌』で確認できたものには年月日を付記している)、各種目の記譜担当者の変遷と五線譜化調査の全体像を可視化した。五線譜化作業の調査は当分の

間、種目ごとに週に一度(一回3時間)おこなわれ、東京音楽学校教員の調査員たちは本務のかたわら適宜調査に従事した。『日誌』の記録によると、複数の種目の記譜を担当していた弘田は週に2、3日調査にあたっていたようだ¹³⁾。

12種目のうち弘田が五線譜化調査の最初から記譜(採譜)に関わった種目は河東節と雅楽で、これらは鉛筆書きの浄書で中断されることなく、弘田がインク書きの浄書まで一続きで完成させたものと思われる。その他の10種目については、明治末年よ

表2 種目別 記譜担当者の経緯

	明治					大正元					昭和元														
	年	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	2	3	～	10
富本節		10月1日～ 三宅(明40～大6)								2月15日～ 弘田(大4)							名見崎多賀と再調査 弘田(大12～13; 浄書)						◇全整理済(昭2.5.20)		
清元節		10月1日～ 鎗田(明40)																						弘田(昭2; 浄書)	
都一中節		10月2日～ 三宅(明40～大2.7)																							
		鎗田(明40)																							
		本居(明41～大3)																							
菅野一中節		10月3日～ 三宅(明40～42)																							
		本居(明41～?)																							
		前田(明42～43 ; 専門分担～?)																							
長唄		11月1日～ 鎗田(明40)																							
		本居(明43.9～大5.12 ; 専門分担)																							
		三宅(?～大7 [大4; 専門分担])																							
		林(明41～42.9) 竹内(明43)																							
河東節 半太夫節 外記節		9月28日～ 三宅(明41～大4.2.8 [明43.9.10- ; 専門分担])																							
		本居(明41～大3)																							
常磐津節		4月27日～ 前田(明42～大6/本居と三宅が稀に加わる)																							
新内節																									
雅楽																									
蘭八節																									
荻江節																									
民謡																									

(『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』(五) 採譜と『日誌』をもとに筆者作成)

り当初の記譜担当者たちが順次記譜(採譜)を始め、鉛筆書きの浄書譜で完了させていたものを、大正末から昭和初年にかけて弘田が改めてインク書きによる浄書を集中的におこなった(後述)。この浄書に際しては、元の前稿をそのまま浄写したのが清元節、常磐津節、新内節、民謡の4種目で(清元節と民謡は吹込みレコードより採譜された原稿)、演奏家とともに再調査をおこなったうえで浄書したのは富本節、都一中節、菅野一中節、長唄、蘭八節、荻江節の6種目である。

しかし、五線譜化作業は徐々に縮小され、特に大正12(1923)年9月の関東大震災の後、記譜担当の前田久八、北村季晴、梁田貞の3名が同年11月1日で囑託を解かれ、記譜者は弘田一人になっていた。その頃から調査の中止を請われるようになったらしく、危惧した弘田は雅楽とそれ以外の邦楽種目についての記譜作業の進捗状況を伝え、インク書き浄書の重要性を訴え、当時の掛長 村上直次郎に「調査延長の願い」を提出した。以下、長くなるが、その大部を引用する(以下、引用文中下線筆者)。

邦楽調査も大震災後前田、北村、梁田の三氏を失ひ、調査の進行に對して、一頓挫を來しました。今では樂譜の方に關しては殆ど私一人と云ふわけで、もし私が今にして今迄調査されたものを、まとめて置かねば後世になって殆ど大部分のものが不明になつてしまふ恐れがあります。然る時には今迄調査の爲め多額の費用をお出し下さつた當局に對し又私利を顧みず努力して下さつた先輩諸先生に對し最後に多少の期待をせられて居る一般國民に對しまことに申しわけがなく、もしこのまゝにして樂譜が打捨てらるゝ時には、私は眞に恥死すべきであると思つて、ここに筆をとりました。〔中略〕

雅 樂

雅樂の調査を始めましたのは湯原校長時代の事で、私が邦楽調査補助を命じられると殆ど同時に雅樂調査が始まり、直ちにその擔當を命ぜられたのでございますから、邦楽調査に於ける雅樂の調査は私によつて始まつたので、従つて私にとっては重大な責任があるので、是だけは是非とも完成させたいと存じます。幸にも東儀

俊龍、奥好義、多久寅及び故多忠基四氏の非常なご盡力によりまして、今や殆ど完全な樂譜が提出されんとして居ります。〔中略〕

雅樂は之を管絃と歌ひ物に分ちますが、管絃六十數曲は大體の調査を終り(五常樂序の如きもの數曲を省き)今は完全な樂譜を浄寫し上げんと努力を拂つて居ります。此時に當つて之を中止しますれば全く今迄の勞力は全部水泡に歸するのでございますから、今の中に此等の曲全部は必ず完成されなければならないのであります。之は私一個の考へではなく、東儀、奥、多三氏の明言せられた處であります。

一つの調査事業を始めた者が其の事業の完成を俟たずして途中で挫折する事の如何に遺憾であるかは何とぞお察し願ひ上げたいと存じます。〔中略〕

其の他の邦樂

種々な先輩の手によりてなされました樂譜は山積して居りまして、之を一見しても先輩の努力は思ひやられます。然るに鉛筆のみで記されてインクで記されて居ないものが、未だ約二千餘頁もありまして、之は速にインクで寫して置かねば間もなく磨滅して消え失せます。不明の點は各派の調査囑託にきゝ、是非共インクで寫して置く必要があります。

雅樂の歌ひ物の調査は第二期とし、今は雅樂管絃の完成と其他の邦樂の樂譜浄書に努力すべきものと思ひます。係長より「一先づ調査を切り上げるやうに」とのお話しは大震災頃からでございますが、大震災後、係員及び室の移動等で昨年中は何も出来ませんでした。今年一月より始めましたのでございますから、せねばならぬ殘務は多くあります。之等殘務整理は以上に記しました通り、今年度だけでは完成されません。何とぞ十四年度即ち大正十年¹⁴⁾三月三十一日迄にして戴きたいと存じます。之れ以上の御延期は私は絶対に申し上げません。只第二期の雅樂の歌ひ物調査をお含み下されば結構と存じます。

以上申し上げます事は目睫に迫つてなさねばならぬ今迄の整理に關します事でございますが、猶一步進めまして今後の邦樂調査に就ては

日を改めて又申し上げたいと存じます。失禮な言もあつたかと存じますが何とぞ私の眞意を御推察の上御判断の程伏して願ひ上げます。

大正十三年九月二十九日 弘田龍太郎^④
邦楽調査掛長村上直次郎殿¹⁵⁾

この願い書には五線譜化作業を完結させることへの弘田の強固な信念と、とりわけ雅楽の五線譜化に対する責務(雅楽の浄書はすべて弘田がおこなった)、そして鉛筆書きで終了している雅楽以外の五線譜をインク書きで浄書すべく重要性を強く主張している。この直訴が実り、弘田は昭和2年度まで調査員の任務に就き、在外研究で渡独する翌3年まで出来る限りの浄書譜を完成させることに尽力した。

3. 調査方法と調査結果の概要

邦楽調査掛における弘田の記譜作業の概要が明らかになったところで、弘田の再調査と浄書の経緯を辿り、浄書された楽曲の一覧を整理した。表3および表4(本論文末尾)の作成にあたり、具体的な調査方法と調査結果の概要を述べる。

3-1:表3『芸大史』「邦楽調査掛」の(二)「調査報告書」¹⁶⁾より弘田の再調査と浄書に関する記述の抜粋一覧

邦楽調査掛では、調査の進捗状況や次年度計画などを「調査報告書」(以下、「報告書」として年度ごとに作成し、担当者がそれを主事へ提出後、主事はとりまとめて掛長(東京音楽学校長)へ報告した。これらの関係報告書類は明治45年度から昭和2年度まで(大正4年度を欠く)が残されており、大正9(1920)年度以降は主に弘田がこれを作成し(時に主事の高野辰之と連名で)、当時の掛長(校長)の村上直次郎へ計18通提出している。このうち弘田の再調査ならびに浄書に関する記述と、それぞれに該当する楽曲名をすべて抜粋し整理したものが表3である。

大正13(1924)年度以降、「報告書」は一年に複数提出され、各報告書には種目ごとに再調査と浄書の状況が詳細に報告されている。一通の報告書に複数の種目を含む場合もあるため、各報告書につき種

目を分けたうえで、報告内容ごとに記述を区分し(a~d)、それぞれに該当する楽曲名を併記した。なお、主語が省略されている記述は、報告書を作成している担当者、すなわち弘田自身がその作業をおこなった人物ということになる。

3-2:表4「弘田の浄書楽曲一覧」

『百年史』「邦楽調査掛」の(五)「採譜」で種目別に挙がっている現存楽曲のうち、弘田が記譜作業に携わった12種目(表2)において、楽譜の現存状態がA(未定稿も含む)の楽曲について弘田の浄書譜の検証をおこない、種目ごとに整理したものが表4である。

「採譜」では邦楽調査掛で作成された五線譜の現存状態を、A(浄書済。未定稿(「未定稿」と押印)を含む)、B(鉛筆書でほぼ完成原稿のもの)、C(未完成)、D(調査されたが所在不明のもの)と分類され、とりわけAとそれ以外(B~D)は厳格に仕分けられ、インク書きのAと鉛筆書きのBの間は明確に線引きがされているという。したがって、弘田が仕上げた浄書譜は現存状態Aの楽譜である可能性がきわめて高いため、本論では「採譜」でAに分類された楽曲を中心に¹⁷⁾、弘田の浄書譜と認められるものがどれくらい含まれているか検証した。

なお、A~Dの700点を超える五線譜は塚原の研究(註4参照)によってすべて整理され、東京藝術大学附属図書館で目録が作成されている。このいわゆる「塚原資料」は、浄書譜Aを中心にデジタル化された五線譜が順次Web上で公開されており、弘田の浄書譜を一部閲覧できる¹⁸⁾。「塚原資料」による現存状態区分は「採譜」のそれに準じているが、稀に両者が異なる場合は表4に並記した。

弘田の浄書譜の検証は、表4を用いて次の手順でおこなった。まず、表3の「報告書」をもとに、各曲に該当する記述との照合をおこない、「浄書した」¹⁹⁾と報告された楽曲を特定した(ア『百年史』調査報告書の欄)。次に、弘田の再調査と浄書が集中的におこなわれた大正12年から昭和3年までの『日誌』を調べ²⁰⁾、「再調査」や「浄書」に関する記録があるものを日付けとともに記した(イ『日誌』弘田の再調・浄書日)の欄)。

3-3:「A未定稿」の扱いについて

表4の検証作業に際し、「A未定稿」の扱いについて触れておきたい。インク書きの浄書譜Aには「未定稿」とされるものも少なからず含まれている。たとえば、富本節においては表3に挙げた18曲のうち半分が「未定稿」であるが、いわば決定稿のAと「A未定稿」をどのように扱うべきか。ここで参照できるのは、邦楽調査掛の設置当時、主事だった富尾木知佳が湯原元一校長に提出した「邦楽調査報告」に書かれた次の条文である。

①一曲全部の記譜を終了するときは嘱託員及調査補助は之を主事に報告し②主事は時日を決定して該曲に關係せる諸員と調査員とを召集して之を審査し完了の上原本ニ依り正副二通を淨寫して之を保存す²¹⁾ (下線筆者)

すなわち、記譜担当者がインク書きの浄書を主事に報告する(下線①)段階が「A未定稿」で、その主事が関係する調査員等と審査を経て完了(下線②)すれば未定稿が消えて「A(決定稿)」となる手順であろう。未定稿とはいえインク書きをした浄書譜であるから、ここから大幅な書き換えや修正がおこなわれることは稀であり、多くは最終確認程度の審査を経て決定稿になると考えられる。実際、「塚原資料」で公開されている五線譜を確認すると、Aと区分されている浄書譜の表紙には「未定稿」に取消し線を引いて、A(決定稿)としているものが散見され、「A未定稿」は限りなくAに近いものとみなして差し支えないように考えられる。

しかし、「A未定稿」の存在は弘田の「再調査・浄書」の時期を見極めるのに注意が必要な場合もある。つまり、「再調査・浄書」が「A未定稿」の前後どちらでおこなわれたのか、という点である。たとえば表3の④の記述に「未定稿デハアリマスガ、一先ヅ淨寫シテ置ク必要ガアリマスノデ…再調査ヲ行ヒ、…之ニヨツテ今回淨寫シタ曲ハ」(下線筆者)とあるように、一般的には、未定稿も含めたインク書きの浄書譜Aを完成させる前に、再調査と浄書を済ませる[再調査・浄書→A未定稿(→A)]が合理的な流れであり、本研究で取り上げた表4の楽曲の

大半はこの順番で「塚原資料」のAが完成されたことを確認できた。しかしながら稀に、「A未定稿→再調査・浄書」という場合もあったようで、前述の富本節においては『日誌』の記録から後者の手続きがとられた可能性のある楽曲(表4(4)富本節の10、14、15)もみられる。ただ、この富本節の場合、「A未定稿」の後、再調査と浄書をおこなったものの、その後の「A(決定稿)」は少なくとも「塚原資料」には存在していないため、「A未定稿」のまま終了した可能性が高い。

以上より、「A未定稿」については慎重に扱いつつ、本研究では表4のAとIを組み合わせながら弘田の浄書譜を次のように特定した。すなわち、A、Iともに「浄書した」記述がある楽曲/A、Iのいずれかに「浄書した」記述がある楽曲については、「塚原資料」のAの五線譜を弘田の浄書譜と特定した(曲名に色付け)。一方、A、Iいずれも記述がないものや、A「調査が終了したことを報告した」(表3の⑦a、⑨aなど)、またはI「再調査」の段階で留まっているものについては、弘田が浄書した可能性は低いとした。

4. 各種目の調査結果

本章では表4をもとに、各種目の調査結果を補足する。()内の数字は表4の各種目につき楽曲名の左に記した通し番号である。

(1) 富本節

前章で述べたとおり、富本節は再調査と浄書の手順について不明な点もあるため、再度整理しておきたい。邦楽の中で最初に調査が開始された富本節における記譜の経緯については、弘田が「報告書」(表3④)の前段で詳しく述べており、要約すると次のとおりである。明治40年10月に開始した富本節の調査につき、嘱託吉野萬太郎が出勤し、記譜は竹内平吉と本居長世の協力も得つつ、主として三宅延齡が担当した。ところが大正6年7月31日に吉野が病気で死去したため、以来調査は中断し今日に至っているという。その間、弘田は大正4(1915)年度のみ記譜に加わり、大正12~13年度に演奏の嘱託員菅野タカ子(名見崎多賀)の協力を得て再調査と浄

書をした。

表3の報告書には前後関係が不明瞭な箇所（たとえば④の最後に、浄書した曲は「七曲」とあるが楽曲名は5曲など）もあるが、当初記譜を担当した三宅が鉛筆書きで浄書した曲は9曲（1、2、4、5、6、7、8、9、17、18）、弘田が再調した8曲のうち浄書譜と確認できたのは7曲（3、10、11、12、14、15、16）である。

（2）都一中節

再調査は演奏の嘱託員 伊藤榎太郎（十代都太夫一中）とともに大正13年12月から開始され、翌14（1925）年1月～3月と10月～11月に集中しておこなわれた。昭和2年5月12日に「全部整理ズミ」。弘田が再調のうえ浄書したのは9曲（2、6、8、9、11、12、14、18、22）、再調せずに浄書した1曲（17）と合わせて浄書譜と確認できたのは計10曲である。

（3）菅野一中節

前述、富本節の嘱託員 菅野タカ子（名見崎）の協力のもと、弘田の再調査と浄書は大正15（1926）年に行われた。作業は3月～6月末と9月中旬～12月末の2期に集中しており、前期では週に一度、名見崎が調査掛に出勤して弘田と再調査し、名見崎が出勤しない合間に弘田が一人で浄書する作業を繰り返している。6月29日の日誌には「本日を以て菅野一中の調査を終る。」とあり、名見崎を伴った再調査はこの段階で終了したと思われる。後期では名見崎との再調査を終えた楽曲をひと月に3曲ずつ、弘田が一人で浄書をおこない、それらすべてに「調査済」の印を押して完成させている。昭和2年4月25日に「全部整理スミ」。弘田が再調のうえ浄書したのは11曲（3、8～13、15、16、18、20）、再調せずに浄書したのは5曲（1、4、5、6、18、22）、よって浄書譜と確認できたのは計16曲である。

（4）長唄

大久保の先行研究（註5参照）をもとに表4を作成した。大久保の研究によると、昭和2～3年にかけて弘田が再調査した楽曲は10曲（うち嘱託員の二代今藤長十郎〔坂田政太郎〕が同席したものは4曲）とあるが、調査結果には12の楽曲に弘田の名前が

あるため正確な照合が難しい。また、表3の「報告書」にはこの期間の長唄に関する報告は皆無である。そこで、本研究では大久保の研究で弘田が再調査した楽曲として挙げている12曲のうち、筆者が『日誌』の中で弘田の浄書を裏付ける記録を確認できた6曲（2、5、6、7、10、11）を弘田の浄書譜とした。

（5）河東節・半太夫節・外記節

河東節（半太夫節・外記節）は弘田が最初の記譜（採譜）から携わった種目であるため、他の種目のような再調査はおこなわれていない。弘田が河東節の記譜を担当し始めた大正4（1915）年以降の『日誌』には作業の様子が克明に記されているので、少し紹介しておこう。

明治41（1908）年から調査が開始された河東節は、当初三宅と本居の二人が記譜を担当していたが、大正4年1月18日より三宅の記譜に弘田も加わるようになり、しばらく『日誌』の記譜者欄には二人の名前がある。同年2月末より三宅から引き継いだ弘田が単独で記譜を担当するようになるが、演奏の嘱託員 伊東秀次郎（山彦秀翁）の欠勤が続いたため、記譜作業は進まなかった。そこで、大正5年2月21日より毎月4回のペースで弘田が伊東宅に出張して調査をおこなった（大正8年2月18日まで続いた）。昭和2年3月21日に「全整理済」。弘田は記譜（採譜）した楽譜をインク書きの浄書譜として完成させたと思われるが、現在「塚原資料」にある河東節の浄書譜Aのうち半数が未公開で（註18参照）、『日誌』調査も未完のため、浄書譜の検証は次稿でおこなう（表4には未掲載）。

（6）常磐津節

常磐津節の記譜作業は大正6（1917）年3月で終了し、弘田が昭和2年に浄書のみおこなった。常磐津節の五線譜化を楽曲ごとに検証した前原の研究があるが、弘田の浄書作業と現存五線譜との照合は不明であるため、筆者は『日誌』の記録から弘田の浄書を調査し、表3「報告書」とを組み合わせ弘田の浄書譜を検証した。10「老松（前弾）」と11「傳授の雲龍」の両曲は、ともに『日誌』に「再調と浄写」した記録がある（後者の11は表3の「報告書」に「弘田が浄写した」の記述もある）が、「塚原資料」

には浄書譜Aが見当たらないため、弘田が浄書したことはほぼ間違いないと思われるものの、現段階では両曲は保留とする。したがって、弘田の浄書譜と確認できたのは5曲（2、3、5、8、9、10）である。

（7）新内節

新内節についても弘田は浄書作業にのみ携わった。検証の結果、1～5の楽曲はほぼ間違いなく弘田が浄書したものと考えられるが、4「明鳥夢泡雪上」と5「若木の仇名草（蘭蝶）」は「塚原資料」の中にインク書き浄書譜Aが見当たらないため、現段階ではこの2曲を保留とし、弘田の浄書譜は3曲（1、2、3）とする。

（8）雅楽

雅楽の調査は大正5年から15年まで約10年にわたり、その後弘田の浄書作業が昭和2年まで続いた²²⁾。嘱託員は宮内省雅楽師の東儀俊龍、多忠基（大正14年から奥好義）、多久寅、記譜担当は弘田であったが、嘱託員はいずれも東京音楽学校で洋楽器の実技を担当していたため、演奏と採譜を兼任した。作業は必ずしも全員出勤によるものではなく、自宅調査もされ、「各自が担当楽器を五線譜化して提出するなど共同作業であり、浄書の段階で弘田一人になった²³⁾」という。大正13年1月から15年まで奥と弘田は東儀宅に出張し調査をしている。

雅楽の五線譜化調査は寺内により詳細な研究結果（註3参照）が発表されているため、それらの資料をもとに、本稿では弘田の浄書に関する事項（『日誌』の調査は寺内による）と本研究の表3「報告書」を組み合わせ、表4を作成した。取り上げた楽曲のほとんどが壱越調に限定されているのは、「塚原資料」に現存する浄書譜Aの大半が壱越調であるためである。なお、雅楽の浄書譜には奥付があり、採譜の完成日と採譜者の名前も書き残されている。『日誌』では大半が採譜の完成日より遅れて弘田の浄書日が記録されていることから、採譜者たちと鉛筆書きの五線譜を完成させた後、弘田がそれをインク書きの浄書譜に仕上げていたことが推察される。弘田の浄書譜と確認できたのは22曲である。

（9）藺八節

大正9年より前田久八と梁田貞が記譜作業を始め、翌年には終了した。当時の演奏の嘱託員 高橋よし（宮藺千春）の死去により、昭和2年に浄書をおこなう際、小林きん（宮藺千香）に再調査を依頼した。3曲すべて弘田の浄書譜である。

（10）荻江節

大正10（1921）年より前田と梁田が記譜作業を始め、同12年に終了した。弘田は同15年に演奏の嘱託員 荻江久（柳原ひさ）に再調し浄書した。8曲すべて弘田の浄書譜である。

（11）民謡

大正10、11年に梁田が蓄音機レコードより採譜した4曲を、同15年に弘田がすべて浄書した。

（12）清元節

弘田は清元節の記譜に直接関わっていないが、大正7年に「延壽太夫実演採譜と蠟管からの採譜による「保名」（一部分）の比較譜を作成し、記譜法を協議²⁴⁾」された際、蠟管からの採譜をおこなった北村季晴と三宅の作譜を、昭和2年に弘田が浄書した（楽譜は二つに分かれているが、どちらも「保名」の一部分なのでまとめて1曲として数える）。

以上、弘田が記譜に関わった12種目のうち、河東節を除いた11種目で弘田が作成した浄書譜は少なくとも計85曲が確認された。今回保留とした曲や河東節が加わると、楽曲数はさらに増える可能性が高い。

おわりに

邦楽の五線譜化作業は弘田の努力によって相当数の楽曲が再調査・浄書、整理されたものの、その後五線譜の採譜は進展せず、楽譜は未公開のまま残されることになったという²⁵⁾。では弘田はなぜこれほどまでに五線譜化作業にこだわったのだろうか。その理由の一端が弘田の論稿「邦楽研究の必要と其の方法」で述べられている。ここで彼は、「出来るだけ多くの曲を楽譜に書き留め、永久保存の道を講じ、

それと同時に音楽そのもの、研究も其の楽譜によつてなすのが至當であると信ずる」(下線筆者)として、「洋楽の楽譜に留める」ことが現今の急務であると訴えている²⁶⁾。この五線譜万能主義的思考は弘田に限らず、雅楽の採譜に短期間加わった兼常清佐は「一曲の雅楽の譜を完成して世界に発表することは、十曲の雅楽を東京で演奏して聞かせる事よりも、遙かに大きな雅楽保存の事業」²⁷⁾とも言っており、科学的で普遍的な五線譜に統一して記すことは邦楽調査掛に共通する理念だったと思われる。すなわち、「伝統音楽を西洋近代の五線譜で記述するという行為は、当時『普遍的言語』と考えられたツールで表記することによって、西洋世界に日本の伝統音楽を説明し、ステイタスを強調するための行為」で、きわめて政治的意味合いが強い行為であったとも寺内は指摘する²⁸⁾。

さらに弘田は、邦楽を五線譜に留めておかねば「往時の面影なく、いつ絶えんとも計り難」く、由々しき結果に陥った例を次のように述べる。いわく日露戦争後に発せられた盆踊り禁止により古く素朴な民謡が絶滅した結果、それは形式を変えて花柳界で流行し、後に盆踊りを復活する際には花柳界のそれを用いなくてはならない。その例が長野県の伊那節だという²⁹⁾。弘田が花柳界の音楽の他にジャズも忌み嫌っていたことはこれまで拙稿で度々論じてきたが³⁰⁾、その理由はそれらが五線譜に記譜されない音楽であるがゆえだったのかもしれない。つまり、五線譜に記譜された音楽こそが上流階級がたしなむべき高尚な音楽とする音楽観である。

弘田のこの論稿が書かれたのは昭和二年二月二十二日で、邦楽12種の浄書の完成に追い込みをかけていた時期であった。自ら「邦楽を楽譜に書く」と云ふ事だけでも、かなり困難な事業である。根気のある着質な研究熱を要する」ことを吐露しながらも、「此の研究の努力に對して同情してくれる者がある時、私は心から悦んで居る。たゞ結論を書く日を今から楽しみにし、不斷の努力を續けて居る」と結んでいる³¹⁾。弘田のいう「結論」が何だったのか、今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、調査方法および資料提供等に多大なるお力添えを頂きました東京藝術大学附属図書館専門員の大田原章雄様に深謝申し上げます。なお、本研究は2019年度科研費 基盤研究 (C) JP19K00142の助成を受けたものです。

註釈

- 1) 五線譜による採譜がおこなわれた種目は、富本節、一中節(都派・菅野派)、平曲、清元節、長唄、河東節、能楽、箏曲、常磐津節、新内節、京歌、雅楽、菌八節、萩江節、民謡である。
- 2) 薦田治子「邦楽調査掛平曲五線譜の成立をめぐる」『東洋音楽研究』第四十七号、1982年、21-48頁。
- 3) 寺内直子『近代日本における伝統音楽の再認識～雅楽の五線譜化をめぐる～』平成12～14年度科学研究費補助金(基盤(C)2)研究成果報告書、2003年。
- 4) 塚原康子「邦楽調査掛関係資料の調査について」大角欣也『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成17～19年度科学研究費補助金(基盤(B))研究成果報告書、2008年、76-110頁。
- 5) 大久保真利子「邦楽調査掛による長唄の五線譜化―事業の実態と再評価―」『日本伝統音楽研究』第9号、2012年、5-19頁。
- 6) 前原恵美「邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察」『無形文化遺産研究報告』第14号、2020年、51-77頁。
- 7) 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社、2003年、553-749頁。
- 8) 日誌には邦楽調査掛関係者の出勤記録を綴った「日誌A」(全19冊)と、明治40(1907)年から昭和3(1928)年までの五線譜化の作業記録を綴った「日誌B」(全22冊)があり、本稿で用いるのは後者である。
- 9) 前掲書註7) 746-749参照。
- 10) 弘田は邦楽調査掛の開設当初から記譜を担当していた本居長世にピアノを師事したが、弘田の調査員への就任に本居が関与したのかは不明である。
- 11) 前掲書註7) 696-701頁。
- 12) 『日誌』の記録を辿ると、記譜担当ではないが「箏曲」の調査研究にも出席している。
- 13) たとえば、雅楽の調査が始まった大正5年度6月の弘田の調査を日誌の記録で確認すると、6月6、10、15、18、24、27、30日は河東節の出張調査、12、19、26日は雅楽の調査とあり、ひと月の3分の1は邦

- 楽調査掛の業務に従事した。
- 14) 『百年史』の誤植により、「十年」ではなく「十五年」であることを原本より確認した。
 - 15) 前掲書註7) 579-580頁。
 - 16) 前掲書註7) 581-619頁。
 - 17) 「採譜」でBやCに分類されていても、表3の「調査報告書」の中で弘田が言及した楽曲や、「塚原資料」でAに分類されている楽曲については例外的に含めている。
 - 18) 一部未公開の浄書譜もある（東京藝術大学附属図書館内では閲覧できるが、コロナ禍により2021年9月現在、学外者の館内立ち入りは禁じられ閲覧できない）ため本研究において弘田の浄書譜すべてを閲覧することはできなかった。なお、弘田の浄書譜は明治学院大学付属日本近代音楽館にも相当数所蔵されており、両館の手稿譜とも複数の筆致が確認できるが、親族の証言によると邦楽調査掛の浄書は弘田と彼の家族が手分けしておこなったという。
 - 19) 弘田は「報告書」および『日誌』の中で、「浄書」と「浄写」を両方使用しているが、本稿では「浄書」で統一して表記する。
 - 20) 先行研究で『日誌』の調査結果を公開している雅楽と長唄については省略した。
 - 21) 前掲書註7) 556頁。
 - 22) 雅楽は記譜の原則が「雅楽記譜法扣」（大正6年4月）にまとめられ、それを修正した決定稿を弘田が作成している（大正七年七月八日付草稿。七月九日提出）。
 - 23) 前掲書註7) 700頁。
 - 24) 前掲書註7) 697頁。
 - 25) 前掲書註7) 555頁。
 - 26) 弘田龍太郎「邦楽研究の必要と其の方法」『音楽』7号、1927年、3-4頁。
 - 27) 前掲書註3) 10頁。
 - 28) 同上、40頁。
 - 29) 前掲書註26) 3頁。
 - 30) 大地宏子「女性雑誌にみる弘田龍太郎の音楽観」『現代教育学部紀要』第13号、2021年、49-61頁、同「成城文化と弘田龍太郎の音楽観—成城小学校の音楽教育と芸術教養に対する保護者への調査結果を中心に—」『現代教育学研究紀要』第15号、2021年、11-23頁。
 - 31) 前掲書註26) 6頁。

受付日 2021年9月30日

受理日 2021年11月1日

Abstract

In 1907, the Tokyo Academy of Music established the Hogaku Chosa-gakari as a research institute for traditional Japanese music. Its main activity was recording traditional Japanese music on wax cylinders, and transcribing it using staff notation. As an investigator with this Hogaku Chosa-gakari, the composer Hirota Ryutaro worked on transcription and staff notation, especially reexamining and preparing finalized notations. After clarifying the full scope of Hirota's notation work with the Hogaku Chosa-gakari, this study focuses on his reexamination and transcription work and summarizes the list of his transcribed compositions with their details. Hirota was involved in staff notation of 12 genres of music including Gagaku and completed more than 80 pieces of music. Against the background of the emphasis on staff notations, this study highlights the political climate toward increasing national prestige at the Hogaku Chosa-gakari, which sought to modernize traditional Japanese music using the European classical music staff notation as a universal language.

Keywords: Hirota Ryutaro, Hogaku Chosa-gakari, Traditional Japanese Music, Transcribing of Staff Notation, Final Transcription

邦楽調査掛における弘田龍太郎の記譜作業について

表 3 調査報告書（再調査および浄書に関する記述）

大正九年度 ①大正十年四月、弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出 大正十年度～十二年度 ②大正十二年七月二日、弘田龍太郎より主事高野辰之へ提出 大正十三年度 ③大正十三年十二月二十四日、弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出（表中下線筆者）		
流派	報告記述	楽 曲
雅楽	數年ノ非常ナル研究ノ結果愈完成ノ域ニ達シ今学期ハ…二曲ヲ完成浄書セリ。	迦陵頻急（壹越調） 賀殿急（壹越調）
富本節	左ノ樂曲ヲ歌終共ニ再調セリ…之ニテ富本節ノ再調ヲ全部終了セリ。此等ハイツレモノモトノ調査ヲ本體トシテ疑問ノ點ヲワシモ訂正セリ。	新曲高尾機梅、御代榮益徳富種、奈須野、家機幾齡三番叟、恵方土產、全盛機花車、松風行平徒戀曲者、春夜障子梅
〃	浄書ノ終リシハ…ノ三曲ナリ。	春夜障子梅、恵方土產、御代榮益徳富種
都一中節	現在再調中ニテ既ニ再調ノ終了セルハ…ノ三曲ナリ。	松ノ羽衣、名寄歳旦園生の松、傾城淺間嶽
④大正十四年三月二十〇日、弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
富本節	絃共ニ調査シテアリマスカラ、未定稿デハアリマスカ、一先ツ浄書シテ置ク必要アリマスカノ原稿ヲ基礎トシテ見點タガリノ私下デ再調査ヲ行ヒ、〔中略〕之ニヨツテ今回浄書シタハ左ノ七曲（ママ）デアリマス。	*御代榮益徳富種（豊の前）、奈（ママ）須野、家機幾齡三番叟、*恵方土產、新曲高尾機梅 *の2曲は③cと重複
大正十四年度 ⑤大正十五年三月十六日、弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
都一中節	再調の上浄寫すもののは次の通りに有之候 …以上七段	天の綱島、早月前道行、松羽衣、丹波與作夢路駒、名寄歳旦園生松、傾城淺間嶽、道行三度笠
⑥大正十五年三月二十三日、弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
雅楽	調査完成浄寫すものは次の通りに候…其の他數千曲調査中又は浄寫中に有之候	音取（各調子）、*賀殿急、*迦陵頻急、空圖嶽、菩薩破（以上、壹越調） *の2曲は③aと重複
大正十五年度 ⑦大正十五年四月三十日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
都一中節	主トシテ前田久ハコレニ當リ、大正十二年未迄ニ同人ヨリ調査ヲ了シテ報告セルモノ次ノ十曲ニ有之候	辰巳の四季、朝光山入、朝光衣洗、甲子、廓の壽、夕霞淺間嶽、道成寺、御代の秋、信田妻、猩々
〃	當時同人ノ報告ニ漏レタルモノ一曲	お夏笠物狂
〃	次イデ大正十四年度ニ至リ弘田龍太郎從來調査未了ノ分ニ關シ都一中ニツキテ再調ノ上浄寫セシメテ大正十五年三月ヲ以テ報告致候ハ次ノ九曲ニ有之候	賤機帶、*傾城淺間嶽、*松の羽衣、*早月前道行、*丹波與作夢路駒、*梅川忠兵衛道行三度笠、*名寄歳旦園生の松、*天の綱島、鉢の木 *の7曲は⑤と重複
⑧大正十五年九月廿八日、高野辰之・弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
雅楽	既ニ完成ノ上浄寫シタルモノ次ノ通りに有之候〔大正八、十四年度の既報告楽曲は略〕	大正十五年一月以降七月迄 *空圖嶽、胡狄酒破、蘭陵王、酒胡子（以上、壹越調） *は⑥と重複
⑨大正十五年十月二十一日、高野辰之・弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
音野一中節	故音野序進本居長世前田久ハ等ガコレニ從事シ大正十二年未迄ニ前田久ヨリ調査ヲ了シテ報告セルモノ次ノ八段ニ有之候	泰平船盡し、二重帶名護屋結、三勝鶴卯酉、自然居士、稽首圓道行、御代の秋、江戸紫衆、業平河内通
〃	次イデ大正十五年ニ至リ、弘田龍太郎從來調査未了ノ分ニ關シ、浄寫淨瑠璃ノ部分ハ出来得限リ原稿ノマツシ音野たかニツキテ再調ノ上浄寫セシメタルモノ次ノ十段ニ有之候	八重霞浪華演奏（かしく）上・新屋敷之段、神樂高砂、墨繪の烏臺、鉢の木、尾波瀨の隠井、鵜飼石和川、沖中川戀梯、安宅道行、松盡し、松養
〃	次イデ四段ハ現在傳ハラザルモノ、如クニテ弘田龍太郎専前田久ハ八段ニヨリテ不明ノ點ヲ補ヒテ浄寫セシメ候	八重霞浪華演奏（かしく）下・墓所之段、常盤御前道行、妹が宿、助六道行
〃	次ノ一段ハ未完ニ候ヘドモ本居長世ガ特ニ精細ニ調査セシモノニ候ヘバ 浄書ノ上併セテ御報告致候	高砂松之段
⑩昭和二年一月、主事高野辰之・弘田龍太郎より掛長村上直次郎へ提出		
京唄調査成績報告書		
⑪昭和二年一月二十八日弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
雅楽	雅楽調査ハ弘田龍太郎主トシテ之ニ從事シ大正十五年十月以降昭和二年一月迄ニ次ノ六曲別紙ノ如ク完成浄寫済ニ相成候間此段御報告ニ及ビ候	武德樂、春鶯囀瀛路、北庭樂、新羅陣王急止承和樂、酒清司（以上、壹越調）
⑫昭和二年三月十九日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
萩江節	前田久ハ、梁田貞、萩江久之ニ從事シ調査ヲ了シテ未ダ其ノ成績ヲ浄寫シテ報告致ササルモノ次ノ一曲有之候	金屋丹前
〃	次イデ大正十五年十二月ニ至リ弘田龍太郎調査未了ノ分ニ關シ萩江久ニツキテ再調査ヲ了シ、浄寫セシメタルモノ次ノ七曲有之候	短夜、高尾、深川八景、松、竹、梅、夜半樂
昭和二年度 ⑬昭和二年五月、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
新内節	本居長世、三宅延齡、富士松加賀太夫、富士松宮古太夫等ガコレニ從事シ調査ヲ了シタルハ左ノ四段ニ有之候（中略）本年度ニ至リ弘田龍太郎右調査済ノ分ヲ浄寫セシメ候	明烏夢泡雪（明烏）上、下、若木仇名草（蘭蝶）、累身舞の段、千日寺名殘鐘（三勝半七）
〃	又調査未完ナルモノ次ノ一段有之候	膝籠毛赤坂並木の段
⑭昭和二年六月三日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
音野一中節	自然居士過古物語二續稿ヲ發見致シ候〔中略〕前田久ハ調査ノ原稿ニヨリ當時たか子弘田龍太郎右調査ノ上別紙ノ通り御報告ス候	居士過古物語續承和樂、酒清司
⑮〔昭和二年〕六月二十一日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
都一中節	本居長世、前田久ハガ「廓の壽」ヲ特ニ精細ニ調査セシ原稿ヲ發見致シ候間浄寫セシメ候上別紙ノ通り御報告	廓の壽
⑯昭和二年十二月一日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
園八節	宮園千春、前田久ハ、梁田貞之ニ從事シ前田久ハ浄寫シテ未ダ報告致ササルモノ次ノ一曲有之候	里の色絲（植木ヤ）
〃	原稿ノマ、ナルモノ次ノ二曲有之候 次イデ本年度ニ入り右二曲ヲ弘田龍太郎、小林八人ニ就テ再調査ヲ了シ〔道行相合巨娃〕及び鳥渡山ノヲ浄寫セシメ候	道行相合巨娃（梅川）、鳥渡山
⑰昭和三年三月二十日、弘田龍太郎・主事高野辰之より掛長村上直次郎へ提出		
常磐津節	先代常磐津文字太夫、本居長世、前田久ハ、之ニ從事シ既ニ調査ヲ了シテ報告ニ及ビ候モノ次ノ五段有之候	子寶三番叟、積戀雪關扉、辰鷹色相扇、傳授の雲龍（「これぞといふすぐれし書師もなきよしけば」迄）、四天王大江山入上、御代の秋
〃	右ノ外前田久ハ浄寫シテ未ダ報告致ササルモノ次ノ一段有之候	四天王大江山入 下
〃	次イデ昭和二年度ニ至リ、弘田龍太郎 原稿ニヨリ浄寫セシメタルモノ次ノ六段有之候間別紙樂譜相添ヘ此段及報告候也	鶯鶯容姿正夢、老松前舞、蜘蛛絲絆弦、心中浮名子の飯柳、傳授の雲龍（「みづから女なりとも」ヨリ「おもてをむくればやうぞなき」迄）、戀中軍初音の旅（「いねお慕うて来りけり」迄）
⑱昭和三年三月、弘田龍太郎・主事高野辰之提出		
清元節	大正十一年度ニ至リ北村季晴 本校ニ於テ特ニ清元延壽太夫ニ命ジテ吹込マシタル蒼音琵琶ニヨリ調査シタルハ次ノモノニ有之候昭和三年度ニ至リ弘田龍太郎浄寫セシメ別紙樂譜相添ヘ御報告ニ及ビ候	保名「戀より戀より」狂ヒテシ定保名「心そぞろに」より「片思ひ」迄

表 4 弘田龍太郎の浄書楽曲一覧

紙糊の都合上、一部順不同

(1) 富本節

	曲 名	元の採譜・記譜者	ア「百年史」調査報告書	イ「日誌」弘田の浄書日	塚原資料	
					現存状態	通し番号
1	幾菊蝶初音道行 前編	富尾木、竹内			A未定稿	481
2	幾菊蝶初音道行(忠信)下篇	富尾木、竹内			A	482
3	新曲高尾機梅	三宅、竹内	③b、④		A未定稿	490
4	草枕露玉川				A	484
5	百夜菊色の世中〔關寺小町〕	三宅、弘田			A	487
6	拙筆力七伊呂波（乙姫）				A	489
7	其梯淺間嶽 上	三宅			A	491
8	其梯淺間嶽 下				A	492
9	年朝嘉例壽				A	493
10	御代榮益徳富種	三宅、竹内	③b、c、④	大正 12.10.23 全部浄書セリ	A未定稿	486
11	奈須野	三宅、竹内	③b、④		A未定稿	488
12	家機幾齡三番叟	三宅、竹内	③b、④		A未定稿	494
13	全盛機花車（木遣）		③b		A未定稿	495
14	恵方土產	三宅	③b、c、④	大正 12.10.19 全部浄書セリ	A未定稿	477
15	松風行平 徒髮戀曲者		③b		A未定稿	479
16	春夜障子梅（夕霧）		③b、c		A未定稿	478
17	御代の秋（二人翁）				A	485
18	忠信物語 〔幾菊蝶初音道行の部分譜〕				A	483

(2) 一中節（都派）

	曲 名	ア「百年史」調査報告書	イ「日誌」弘田の再調・浄書日	「百年史」現存状態	塚原資料	
					現存状態	通し番号
1	お夏笠物狂	⑦ b		A	A	251
2	道行三度笠	⑤	大正 14.2.5 終りまで再調	A	A	245
3	猩々	⑦ a		A	A	257
4	吉原八景			A	A	273
5	朝光山入段	⑦ a		A	A	253
6	天の綱島	⑤	大正 14.3.5、7.1 再調査	A	A	263
7	道成寺鐘供養	⑦ a		A	A	230
8	丹波與作 夢路駒	⑤	大正 14.2.19-3.26 再調	A	A	261
9	早月前道行	⑤	大正 14.10.7 全部再調	A	A	254
10	信田妻	⑦ a		A	A	256
11	尾上の雲賤機帶	⑦ c	大正 14.1.15-22 再調査	A	A	252
12	名寄歳旦園生松	③ d、⑤	大正 13.12.18 全部再調	A	A	248
13	辰巳の四季	⑦ a		A	A	262
14	鉢の木	⑦ c	大正 15.4.22 浄写	A	A	233
15	夕霞淺間嶽	⑦ a		A	A	277
16	所作の切天人羽衣			A	A	337
17	廓の壽	⑦ a、⑮	昭和 2.5.5 浄写ズミ	A未定稿	A	241
18	傾城淺間嶽	③ d、⑤	大正 13.12.17 全部再調	B	A	238
19	瀧沢十二段			B	B	285
20	朝光衣洗の段	⑦ a	昭和 3.1.24 再調	B	B	313
21	朝光童子對面の段		昭和 3.1.16-24 再調	B	B	318
22	松羽衣	③ d、⑤	大正 13.12.18 全部再調	B	A	243
23	御代の秋（都太夫一中・音野序進合作）	⑦ a		B	A	246
24	甲子	⑦ a		B未定稿	A未定稿	240

(4) 長唄

	曲 名	イ「日誌」弘田の再調・浄書日	塚原資料	
			現存状態	通し番号
1	（めりやす）東金	昭和 3.1.26 全部再調	A	545
2	櫻狩	昭和 2.9.14 浄写ズミ	A	536
3	英執着獅子	昭和 3.3.9 再調	A	521
4	初咲法樂舞	大正 4 年 1 月～大正 6 年 6 月	A	522
5	心猿の秋の月	昭和 3.2.10 浄写ズミ	A	539
6	正礼附根元草摺	昭和 2.9.21 浄写ズミ	A	541
7	末廣狩	昭和 3.2.7 浄写ズミ	A	542
8	高尾機梅	昭和 3.1.13 全部再調	A	543
9	童獅子（所作の切）	昭和 2 年 4 月	A	548
10	御代の秋（二人翁）	昭和 2.9.12 浄写	A	529 530
11	〔大座落〕櫻櫻宇佐弊	昭和 2.7.11 浄写	B	567
12	吉原雀	昭和 2 年 12 月	五線譜現存無し	

(3) 一中節（菅野派）

	曲 名	ア『百年史』 調査報告書	イ『日誌』 弘田の浄書日	『百年史』 現存状態	塚原資料	
					現存状態	通し番号
1	萬屋助六道行	㊹ c	大正 15.11.24 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	272
2	業平河内通	㊹ a		A	A	247
3	八重霞浪華浜萩 (かしく) 上 新屋敷之段	㊹ b	大正 15.9.30 浄写終る。 [調査済] 印	A	A	270
4	八重霞浪華浜萩 (かしく) 下 墓所之段	㊹ c	大正 15.10.18 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	271
5	常磐御前道行	㊹ c	大正 15.10.25 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	269
6	常磐御前道行 妹が宿	㊹ c	大正 15.11.15 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	268
7	泰平船盡	㊹ a		A	A	259
8	鉢の木	㊹ b	大正 15.4.26 歌絃全部再調	A	A	232
9	鶴剣石和川	㊹ b	大正 15.6.22 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	234
10	墨絵の島台 (江の島)	㊹ b	大正 15.12.1 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	258
11	松盡し	㊹ b	大正 15.4.29 浄写ズミ完成 [調査済] 印	A	A	244
12	松襲	㊹ b	大正 15.5.17 浄写ズミ [調査済] 印		A	242
13	沖中川戀梯	㊹ b	大正 15.6.3 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	250
14	椿首國道行	㊹ a		A	A	239
15	尾波瀬の隠井 (梅の由兵衛道行)	㊹ b	大正 15.9.15 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	249
16	神楽高砂	㊹ b	大正 15.10.13 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	237
17	自然居子過去物語 (1)	㊹ a	大正 15.5.13-26 歌絃再調	A	A	235
18	自然居子過去物語(続き)	㊹ d		記載なし	A	236
19	二重帯名護屋結	㊹ a		A	A	231
20	安宅道行	㊹ b	大正 15.5.27 浄写ズミ [調査済] 印	A	A	229
21	三勝鶴卵雪	㊹ a		A未定稿	A	255
22	高砂松の段 (未完成、前半のみ)	㊹ d	大正 15.11.26 浄写ズミ [調査済] 印	A	C	260
23	夕霞浅間嶽	審音器吹込みからの採譜 (前田、弘田、北村、梁田)		A未定稿	A	277

(8) 雅楽

	曲名	奥付 記讀者名	ア『百年史』 調査報告書	『百年史』 採譜 (奥付 日付)	イ『日誌』 弘田の浄書日等	塚原資料 通し番号
	〔壹越調・平調・太食調・雙調・黄鐘調・盤渉調〕					
1	音取	東儀・多忠・ 多久・弘田	⑥	大正 8 年 7 月 31 日調査済		18
	〔壹越調・平調・雙調・黄鐘調〕					
2	調子	東儀・多忠・ 多久・弘田		昭和 2 年 3 月	昭 2.3.28 完成	4
	〔平調〕					
3	越殿樂	東儀・奥・ 多久・弘田		大正 8 年 7 月 31 日調査済		5
	〔壹越調〕					
4	迦陵頻急	東儀・奥・ 多久・弘田	③ a	大正 13 年 12 月 17 日完成	(大正 13.12.17 全部再調)	12
5	賀殿急	東儀・奥・ 多久・弘田	③ a	大正 13 年 12 月 19 日完成	(大正 13.12.19 全部再調)	14
6	壹園嬌	東儀・奥・ 多久・弘田	⑥	大正 14 年 4 月 23 日完成	(大正 15.10.22)	8
7	菩薩破	東儀・奥・ 多久・弘田	⑥	大正 14 年 4 月 20 日完成	? (大正 14.2.13 全部再調)	1
8	春鶯囀入破	東儀・奥・ 多久・弘田		大正15年4月	大正 15.5.19 調査ズミ	24
9	蘭陵王	東儀・奥・ 多久・弘田	⑧	大正15年4月	大正 15.5.20 調査ズミ	19
10	胡飲酒破	東儀・奥・ 多久・弘田	⑧	大正15年5月	大正 15.5.19 調査ズミ	17
11	酒胡子	東儀・奥・ 多久・弘田	⑧	大正15年6月	大正 15.9.15 浄書ズミ完成	22
12	北庭樂	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年6月	大正 15.11.17 完成	6
13	春鶯囀風踏	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年9月	大正 15.11.17 完成	23
14	酒青司	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年10月	大正 15.11.17 完成	27
15	武德樂	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年10月	大正 15.11.17 完成	3
16	新羅陵王急	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年11月	(大正 15.12.1 調査ズミ)	21
17	承和樂	東儀・奥・ 多久・弘田	⑪	大正15年12月	(昭和 2.1.13 調査済)	26
18	賀殿破	東儀・奥・ 多久・弘田		昭和 2 年 1 月	昭和 2.3.23 浄書済	13
19	回盃樂	東儀・奥・ 多久・弘田		昭和 2 年 1 月	(昭和 2.3.2 完成)	10
20	迦陵頻破	東儀・奥・ 多久・弘田		昭和 2 年 1 月	(昭和 2.3.17 完成)	11
21	十天樂	東儀・奥・ 多久・弘田		昭和 2 年 1 月	(昭和 2.2.24 完成)	9
22	胡飲酒序	東儀・奥・ 多久・弘田		昭和 2 年 2 月	(昭和 2.3.17)	16

(6) 常磐津節

	曲 名	元の採譜・ 記讀者	ア『百年史』 調査報告書	イ『日誌』 弘田の浄書日	『百年史』 現存状態	塚原資料	
						現存状態	通し番号
1	子寶三番叟	常磐津文字太夫、 本居・前田	㊹a		A	A	414
2	鶯鶯容姿正夢	本居・前田	㊹c	昭和 2.6.15 浄写ズミ	A未定稿	A未定稿	413
3	蜘蛛絲絆弦	本居・前田	㊹c	昭和 2.6.29 全部再調 浄写ズミ	A未定稿	A未定稿	416
4	戻鶯色相眉	本居・前田	㊹a		A	A	419
5	心中名残の鮫鞘	本居・前田	㊹c	昭和 2.7.7 歌絃全部再調 浄写	A未定稿	A未定稿	420
6	四天王大江山入	常磐津文字太夫、 本居・前田	㊹a			B	434
7	四天王大江山入 下	常磐津文字太夫、 本居・前田	㊹b	(昭和 2.6.17 再調)	A	A	421
8	戀中車初音の旅	常磐津文字太夫、 本居・前田	㊹c		A未定稿	A未定稿	415
9	御代の秋	本居・前田		昭和 2.6.30 浄写ズミ	A	A	417
10	老松 (前弾)	本居	㊹b	昭和 2.6.20 全部再調 浄写ズミ	C	C	430
11	傳授の雲龍	前田	㊹a、c	昭和 2.7.1 歌絃再調 浄写	C	B	422
12	積懸雪蘭扉	前田	㊹a		C	C	436
13	紅葉笠絲錦色木		未完了のもの 次の一段有				

(7) 新内節

	曲 名	ア『百年史』 調査報告書	イ『日誌』 弘田の浄書日	『百年史』 現存状態	塚原資料	
					現存状態	通し番号
1	伊達模様阿國歌舞伎 (黒身寶の段)	㊸ a	昭和 2.3.4 浄写ズミ	A	A	405
2	千日寺名残鐘	㊸ a	昭和 2.3.16 浄写ズミ	A	A	406
3	明烏夢泡雪 下	㊸ a	昭和 2.3.10 浄写完成	A	A	404
4	明烏夢泡雪 上	㊸ a	昭和 2.1.19 浄写ズミ	B	B	407
5	若木の仇名草 (蘭麝)	㊸ a	昭 2.1.21 浄写ズミ	B	B	412
6	道中膝栗毛坂笠本の段	㊸ b		C	B	410

	曲 名	元の採譜・ 記譜者	ア『百年史』 調査報告書	イ『日誌』 弘田の再調・浄書日	塚原資料 現存状態	通し番号
(9) 菰八節						
1	道行相合炬燵 (梅川)	宮蘭千春： 前田・梁田、	㊹ b	昭和 2.5.2 全部再調	A	379
2	島邊山	前田・梁田	㊹ b	昭和 2.1.14 全部再調	A	381
3	里の色絲	宮蘭千春：	㊹ a	昭和 2.5.30 浄写ズミ	A	380
(10) 萩江節						
1	高尾 (高尾機梅)	前田・梁田	㊹ b	大正 15.12.20 浄写ズミ [調査済] 印	A	390
2	深川八景	前田・梁田 / 萩江	㊹ b	大正 15.12.22 浄写ズミ [調査済] 印	A	386
3	竹	前田・梁田 / 萩江	㊹ b	大正 15.12.20 浄写ズミ [調査済] 印	A	391
4	短夜	前田・梁田	㊹ b	大正 15.12.22 浄写ズミ [調査済] 印	A	389
5	松	前田・梁田 / 萩江	㊹ b	大正 15.12.16 浄写ズミ [調査済] 印	A	388
6	金屋丹前	前田・梁田 / 萩江	㊹ a	大正 15.12.20 浄写ズミ [調査済] 印	A	387
7	夜半樂	前田・梁田 / 萩江	㊹ b	大正 15.12.9 浄写ズミ [調査済] 印	A	393
8	梅	前田・梁田 / 萩江	㊹ b	大正 15.12.10 浄写ズミ [調査済] 印	A	392
(11) 民謡						
1	相馬節	梁田		大正 15.4.26 浄写ズミ	A	640
2	米山節	梁田		大正 15.4.21 浄写ズミ	A	638
3	磐城平盆踊唄	梁田		大正 15.4.26 浄写ズミ	A	639
4	おいとこ節	梁田		大正 15.4.21 浄写ズミ	A	637
(12) 清元節						
1	深山櫻及兼樹振 (保名「戀よ戀」～)	北村	㊹	昭和 2.6.24 浄写	A ?	442
2	深山櫻及兼樹振 (保名「心そぞろに」～)	北村	㊹	昭和 2.7.6 浄写	A ?	443